平成２９年１１月１０日
北海道新聞

まど

ハロウィーン

ハロウィーンの先月31日、日高管内新ひだか町の町公民館には、魔女の姿に仮装した子供ら約千人が訪れ、くじ引きやビンゴ大会で盛り上がった。ピエロ姿でバルーンアート作りに精を出した日高管内しずない農協青年部の上島大輔さん(39)は「喜んでくれてうれしい」と笑顔を見せた。

始まりは2007年。町郊外の農協倉庫前の駐車場でこぢんまりとした催しだった。農協の感謝祭で、重量当てクイズに使っている巨大カボチャを上島さんが見て、「終われば捨てるの？　もったいない」と提案したのがきっかけだった。

米国に語学留学の経験があった上島さんは、英会話を教えていた子供たちを喜ばせようと独自に催しを企画した。直径1㍍前後のカボチャなどを集め、参加者に目や口をくりぬいてもらったところ、大盛況だった。翌年は雨にもかかわらず、大勢が訪れた。

評判を聞いた農協幹部が「静内の街中でやろう」と声を掛け、公民館での開催が定着した。近年は静内高の生徒も手弁当で手伝ってくれる。「来年以降は若い世代に運営を引き継いでいきたいなあ」。上島さんはそう言うと周りを見回し、目を細めた。

（升田一憲）